金高新聞

発行所
金沢市泉本町3－111
金沢高等学校新聞部

校訓と教育理念

質実剛健の気風を高揚し
共に求める真理
共に育む友愛
共に尊ぶ礼節
共に鍛える心身

固い決意を胸に!!

第62回卒業式挙行される

平成十九年四月、新生活の希望を胸に高校生活をスタートさせた生徒たち。三年間の様々な経験と思い出を胸に、四百五名が学び舎をあとにそれぞれの未来に向かい一歩を踏み出す。国内の経済情勢は依然厳しく出口が見えない状況の中、自分を信じ強い気持ちを持って、夢に向かって突き進んで欲しい。

思い出のつまった学舎

昨年は、「トヨタが生産台数世界一に」「コンビニ業界史上最高の利益に」など景気の回復を思わせるような新聞記事が見える一方で、失業率は五%台に高止まり、倒産する企業も多く、一向に経済の浮上を実感できないのが本当のところのようだ。私学を取り巻く環境も、少子化の影響などで生徒数が減少する傾向にあり、厳しい状況が続いている。そんな中でも金沢高校の教育力をあげるために、生活習慣の確立、学力向上をめざして新しい取り組みが始まった年でもあった。

暮れより断続的な積雪があり、厳しい寒さの中の年明けとなった。二月に入っても寒い日が続き、ようやく春の気配が感じられるようになったのは二月末だった。そして、本日三月二日、本校の第六十二回卒業証書授与式が、第一体育館において、多くの来賓・保護者・教職員・在校生が見守る中、厳粛に挙行され、本田学校長より、四百五名に卒業証書が授与された。

参列者の盛大な拍手の中、同窓会より贈られたコサージュを胸に誇らしげに入場した卒業生は、クラス担任から一人一人名前を呼ばれると、しっかりとした声で返事し起立。土谷有輝君（三年八組）が代表して卒業証書を受け取った。今年は、返事をして起立する卒業生の姿が大型スクリーンに写し出され、参列した保護者も我が子の晴れ姿を間近に見ることができた。

本田学校長の式辞、河合理事長の告辞に続き、榎本俊樹後援会会長が祝辞をのべ卒業生の前途を祝福した。松野凌也君（二年二組）の送辞、本多恭子さん（三年五組）の答辞の後、参列者全員で「蛍の光」を斉唱、最後に卒業生全員で保護者に感謝の言葉を述べ、厳粛な中にも感動的な式となった。

式に臨んだ卒業生は、緊張した表情の中にも、三年間の生活を振り返って懐かしさをかみしめているように見えた。仲間と共に創り上げた学校行事の数々。団結し盛り上がった体育祭。模擬店やホーム発表に苦心した文化祭。印象深い修学旅行。阿蘇の雄大さや長崎の夜景の美しさ、ホーム別研修などの自主行動の楽しさを満喫した。

また、夏の甲子園で汗にまみれながら声を限りに声援したことも、かけがえのないものとして心に刻まれている。苦しかった部活動の日々も今となっては懐かしく思い出すことができる。

しかし、明日からは新しい環境の中で、自らを鍛えていかなければならない。折しも日本は厳しい経済・社会情勢の中にある。将来が約束されているわけではない。夢が挫け、立ちすくんでしまうこともあるだろう。そんな時にも自分を信じ、金沢高校での「学び」を財産として、常に前向きに自分を成長させていって欲しい。

三月一日には卒業式の予行と前日表彰がおこなわれた。補習で行ってきた華道の古流師範免許状が女子二十八名に授与され、代表して相川未紗都さん（三年一組）が家元より免許状をうけた。加えて以下の各賞が学校長から授与された。

○生徒会特別功労賞
山本大樹・野崎剛志・佐々木駿
櫻井義之介・林鼎平（野球部）
大町慶雄・吉田覚（男子テニス部）
筒井智明（水泳部）
本多恭子（かるた）
奥野大裕・土谷有輝・藤井大東達郎（剣道部）

○生徒会功労賞
井出夏海（空手）他五十七名

○生徒会努力賞
嶋田竣（陸上部）他二十五名

○三カ年皆出席賞
片山紗希（三年一組）他八十五名

○私立中高連合会長賞
西村成美（三年一組）

○ロータリー・ガバナー賞
加藤毅士（三年二組）

また、三年生の終業式となった二月八日には、目録交換会が行われ、卒業生から在校生には、行事で使用するテント一張りが、在校生から卒業生には、卒業証書のケースと印鑑付きボールペンが贈られた。

卒業おめでとう。

私の大好きな冬の星座にオリオン座がある。地球から四百三十光年の距離にあるこの星座の左上を占めるのが赤色巨星ベテルギウスだが、なんとこの星が大爆発で消滅する兆候があるという。その時期は明日かもしれないし、二万年後かもしれないとのこと。その時、ベテルギウスは満月ほどの大きさと明るさで三ヶ月間も光り輝き、星にしては短い八百五十万年の命を終えるという。永遠に思える星の輝きにさえ突然の終わりがくる。人の命もあっという間だが、星との違いは、自分の意志で一生を作っていけるということだろう。

三年生の終業式で、七大陸の最高峰のうち六つに単独無酸素で登頂を果たし、最後のエベレストに今年十月再チャレンジする若き登山家栗木史多（のぶかつ）さんの話を紹介した。彼は高校卒業時、特別な夢も希望もない平凡な青年だった。就いた仕事が牛丼屋のバイト。そんな彼が、別れた彼女が登山好きだった理由を知りたいという単純な思いから登山を始め、その後も一歩踏み出す勇気を持ち続けるうちに、多くの人のサポートもあって、どんどん世界が広がっていったという。

彼は、数々のチャレンジを経て、「自分にはエベレスト単独無酸素登頂という大きな夢がある。しかし、それをやり終えた後も、人に元気や希望を与え、その素晴らしさを世界中に伝えていくという自分の使命は変わらないだろう」と語る。彼のエピソードは、『人間は皆そんなに変わらないのだ。自分も頑張ればやれるかもしれない』という希望を与えてくれる。

卒業生の皆さんも、一歩を踏み出す勇気とそれを続ける強さをもって、自らの夢に向かい頑張って欲しい。私たちは、皆さんが卒業してからも、ずっとそのサポート隊でありたいと思っている。

主張

言葉を考える

『抑』と『適』。「抑（おさ）える」「適（てき）する」は読めると思いますが、一字の場合はどう読むと思いますか?「そもそも」「たまたま」と読みます。「抑どんな意味ですか?」とか、「適あそこを通りかかりました。」などの使い方をしますが、日常生活の中ではこんなふうに使うことが少ないのに加え、書く場合は平がな表記するので、ほとんどなじみの無い漢字の読みです。

先日テレビで、タレントが一週間漢字検定の猛勉強をして、検定一級の合格をめざすというバラエティ番組を放送していました。先に紹介した漢字は、その中で取り上げられていた検定問題です。日頃使うことのない漢字を読んだり書いたりすることに、どれほどの意味があるんだろうかと考え込んでしまいました。結果は猛勉強が功を奏したのか、検定試験に合格しましたが、見ていて、検定合格よりもきちんとした文章を書くことや、読みやすい字を書くことをもっと練習した方がいいんじゃないかと思いました。どちらにしても、漢字検定はもっと実用的なものにしたほうが良いと思いました。

一方、携帯電話のメールについて、五十人の中学生と十人の保護者が意見を交わす討論番組が放送されました。中学生が一日にメールのやりとりをする数の多さにびっくり。百回なんていうのはザラで、五百回以上、千回なんていう人もいました。どうしてそんな回数になるのかわかりませんでしたが、メールをテレビカメラで撮影してもらって納得。ほとんど単語のやりとり。例えば、今日片町で買い物をするので一緒に行かないかと誘う場合のメール。「今日ひま」「うんひまだよ」「片町いく」「いいよ」「12時にまちあわせようか」「わかった」「ばしょどこ」「ラブロ前は?」「いいよ」これで双方四回ずつメールをやりとりしたことになる。回数もさることながら、ほとんど平がなの文章。変換機能があるのだからと思うのだが、変換する時間も惜しいのかもしれない。一緒にいて会話するように、携帯電話のメールを使いたいのかもしれないが、携帯の電話機能を使えば、うんと時間の節約になると思うのだが。中学生の思いは、「いつでも、誰かとつながっていたいから」ということらしい。

読めなくて当たり前の漢字が横行する検定。簡単な漢字でも平がなで済ましてしまう若者のメール文化。そんな例を見ていると、これから日本人の言葉はどうなっていくのだろうかと心配になる。言葉の重要な役割は、思いを伝え合うということだ。相手の思いを正確に知るところから良好な人間関係が生まれる。逆に正確に伝わらずに、いらぬ誤解を招き、人間関係がぎくしゃくしてしまうという話をよく聞く。たとえ単語中心の会話でも、しぐさや言葉のイントネーションで伝わることもあるだろう。（メールの場合はそれも無理かもしれない。）サッカー選手のようにアイコンタクトなんてこともあるかもしれない。しかし、自分の考えや思いを言葉でしっかり伝えるということの重要性は現代でも変わらないのではないだろうか。いや、人間関係が希薄になり、それが一因でおきるトラブルが絶えない現代だからこそ必要だと思う。知ったかぶりの難しい表現なんかよりも、素直な気持ちをわかりやすい言葉に載せて伝えることが求められていると思う。

思いを贈る

やり遂げることの素晴らしさ!

卒業生　梅木　優衣

金沢高校で過ごした三年間が終わろうとする今、振り返って見ると私は大事なことを学び、確実に成長できたと実感できるように思います。

高校生活で一番大変だったことは、部活動と勉強の両立でした。私は硬式テニス部に三年間所属していました。部活だけでなく習い事をやっていて、なかなか充分な勉強の時間が確保できないで悩んでいる仲間や先輩を何人も見てきました。私もその一人でした。一年生の頃はそうでもありませんが、二年生になり、三年生に近づくにつれ、周りの雰囲気はどんどん大学受験を意識し緊張感あるものになっていきました。私もだんだん勉強面が不安になり、このまま部活動を続けていて良いのだろうかと思うようになりました。辞めようかと何度も悩みました。そんな私を励ましてくれたのは、仲間や家族、先生方でした。悩みを相談した時友達は、「部活頑張っているところが優衣の魅力なんだから、テニスは最後までやり遂げた方が良いよ。」と言ってくれました。友達のその一言で何か吹っ切れたような気がして、「自分がやろうと決めた事は最後までやり遂げよう。」と心を決めることができ、三年間部活を続ける事ができました。今は、自分が周りの人たちに支えられているんだということを実感できます。在校生の皆さんも何かに悩んだときは、一人で抱えるのではなく、周りの仲間や家族、先生に相談して下さい。きっと何かのヒントが得られるはずです。

でも、最後は自分で決めなければなりません。結果がどうあれ、それを他人の所為にはできません。「誰かがそう言ったから…」という選び方をしても、最後までやり遂げることは難しいでしょう。皆さんもこれから自分で決断し選択しなければならない場面にぶつかると思います。進路の決定もその一つです。いろんな人にアドバイスを受けながら、最後には自分で選んだ道ならば、きっと最後までやり遂げることができます。そして、一つのことをやり遂げることで、達成感や周囲の人たちの支えを実感することができます。私は、金沢高校の三年間でこのことを学び成長できたと思います。「ありがとう」そしてみんなも頑張って…。

今はまだ旅の途中…

生徒会長　松野　凌也

二月六日、アメリカンフットボールの王者を決める「スーパーボール」が開催されました。結果は今年のシーズンを通して一敗だけと安定していたニューオリンズ・セインツが、後半の見事な逆転劇で勝利し栄冠を勝ち得ました。しかし、数年前までこのチームは、「お荷物」と呼ばれるほど弱く最下位の常連でした。そんなセインツが変わる契機となったのが、五年前のハリケーン「カトリーヌ」でした。特に被害の大きかったのがニューオリンズで、傷ついた街や人々を勇気づけようというところから、セインツ（聖者達）の行進が始まったのです。地元を襲った悲劇が、栄冠へのバネになったのです。

さて、卒業される三年生も、金沢高校での三年間で様々なものを背負い、強くなり成長したのではないでしょうか。そしてこれからも、将来の夢のために、愛するもののために、困難に立ち向かうことと思います。それに続く私達在校生もそれぞれの悩みや壁にぶつかることと思います。そんな時には仲間や家族・先生方、そして先輩方が残してくれた伝統やその姿が支えとなってくれると思います。

しかし、新しい世界に旅立つ先輩方には、高校時代のようなゆったりとした時間があり、質問や悩みの答えを親切にアドバイスしてくれる人や機会に必ずしも恵まれるとはかぎりません。でも、この学校で伝統を受け継ぎ、時には新たな理念を掲げ、僕たち下級生の手本となってくれた先輩達なら、厳しい環境の中でもそれを乗り越えて前進してくれると信じています。

先輩方一人一人が、信念を持って、迷わず堂々と、自分の人生という旅路を突き進んで行く姿を楽しみにしています。最後になりましたが、ご卒業おめでとうございます。そして、皆さんの健闘を祈りつつ、お礼の言葉を言わせていただきます。ありがとうございました。

夢に向かって輝け!!

学年主任　四ヶ浦　弘

展望台

フランスの哲学者アランの言葉に「悲観主義は気分（感情）だが、楽観主義は意志（思考）である。」というものがある。悲観的になることと、楽観的になることを私達はともするとコインの裏表のように理解しがちだが、もともと出所の違うものを並べて比較するほうがおかしいのだと思う。

最近世界的に悲観的な風潮が多いと感じる。昨年暮れデンマークで開かれた地球温暖化対策の世界会議ＣＯＰ15は、先進国と発展途上国の対立で成果をあげることができなかった。「こんな風では地球は取り返しのつかない状況になるのではないか」という声も多い。日本でも、国民の期待を背負って登場した民主党鳩山内閣であったが、政治資金問題でつまずき、支持率は低下する一方で、国民の間には「政治なんて誰がやっても大差ないんだ」というあきらめの気配が漂い始めた。

しかし、地球温暖化や鳩山内閣の支持率に悲観的になるのは感情の部分だ。現実には、太陽光発電などクリーンエネルギーの開発で地球温暖化をくい止める努力が世界中で進展している。内閣の政策も「事業仕分け」などのように、財政の透明性を高めようと努力している。そんな努力を素直に認め、論理的に思考すれば、問題解決のための道筋を思い描くことも決して夢物語ではない。

「人間は感情の動物である」という言葉もあるくらいで、我々は悲観的になりやすい動物らしい。しかし、悲観的になるあまり、現実をありのままに見つめ、そこから前進するエネルギーをくみ取る努力を怠るようでは困る。のどがカラカラに乾いていて、コップに水が半分しか残っていなかったとして、「ああ、あと半分しかないのか！」と思うか、「ああ、まだ半分も残っていた！」と思うか、さて君はどっちだろう。

全国の大舞台に挑む

選抜大会特集

昨秋の県新人大会を基準に各種目で選抜大会が開催される。本校からは自転車部・柔道部・少林寺拳法同好会が出場する。各部は三月に行われる大会に向けて練習に余念がない。また、放送部、箏曲同好会も新人大会の成績から、今年八月に宮崎県で開催される全国総合文化祭に石川県代表として参加することを決めた。

小倉で熱いレースを！

自転車部

昨年十一月の県新人大会で二年連続完全優勝した本校自転車部は、今年三月、福岡県小倉で開催される平成二十一年度全国高等学校自転車競技選抜大会に二人の選手を送り込む。二年生の山崎航君（六組）と清水恒太君（八組）である。

二人は県新人戦において、団体二種目（四kmチームパーシュートとチームスプリント）の主要メンバーであったほか、山崎君はスプリントと一kmタイムトライアルで優勝し、清水君は三kmインディビデュアルパーシュートで優勝した。

この結果が評価され、二人は全国選抜大会に出場することになった。

清水君は「とにかく頑張ります。大会では、ロードでは優勝、トラックでは入賞を目指しています」と話してくれた。去年のレースではいい走りができたので、手ごたえを感じているそうだ。冬場は筋力アップを目指してウェイトに力を入れてきた。二月の中頃は少し体調を崩してしまったが、一カ月半後の大会にはベストの状態にもっていってくれるだろう。

山崎君は去年、広島で行われた全国ジュニアロードレース（十七才未満）で優勝した。続くインターハイでもポイントレースで九位という素晴らしい成績を収めた。三月にまた大きな大会に出場する山崎君は「すべての反省を踏まえて大会に臨みたい。トラック競技ではポイントレースに優勝すること。ロードではミスせず走って入賞を目指します。」と抱負を話す。「ウォーミングアップでは自転車のまわし方に気を配りたい。」「レース中は集団の中での位置取りに気をつけたい。」「勝負をかけるところを間違えないようにしたい。」と、大会に向けて話す山崎君の口調は静かながら熱い。

清水君も山崎君も冬場は筋力アップに余念がない。新人大会のころよりも、体が大きくなっていることが制服の上からでも分かる。二人の活躍に期待する。

内灘競技場へ練習に向かう山崎君（左）と清水君（右）

宮崎に響け金沢の音

箏曲同好会

邦楽合同発表会で演奏する箏曲同好会

本校箏曲同好会が今年八月、宮崎県で行われる全国総合文化祭に参加する。部員は現在六人。部長の越柴聡美さん（二年七組）を中心に活動している。

全国総文祭で披露する予定の曲は「舞踊組曲」。よくあるお琴のための曲ではなく、現代風の曲で、転調が多く、リズムが取りにくい。しかもテンポも変わる。とても難しい曲だ。演奏は、メロディーを主に担当するⅠ琴と、主にリズムを担当するⅡ琴とに分かれて行う。Ⅱ琴の一番前で弦をはじく人が演奏をリードする。この位置に座るのが部長の越柴さんである。

越柴さんは「金沢高校は他の学校と比べて部員が少ないのでプレッシャーを感じています。全国の舞台にたつということは初めての経験だが、あまり意識しないようにしています。賞をとるとかではなく、いい演奏ができるように頑張りたいです。」と話してくれた。

越柴さんは部活動の時間以外にも時間をみつけて練習しているという。越柴さんは「現一年生は全国総文祭での経験がこれからのコンクールでも力になるはず。」とも話してくれた。次の舞台につなげることも考えている。また、箏曲同好会では仲間が一人でも多くなることを願っている。

今は少人数で舞台にあがる予定だが、他の参加校を圧倒するような演奏を期待する。

ニュージーランドから交換留学生のベン・マッシス君が来ています。2年生のクラスで授業を受け、放課後はバドミントン部の活動に週3～4日、参加しています。ベン君に日本や金沢の印象などを聞いてみました。

Hello Ben Matthes

①日本のイメージについて来る前と来た後では変わりましたか？

B：「日本に来る前から、とても興味を持っていたので、日本についていろいろ調べました。手に入る情報というのは、日本の特異な面をクローズアップするようなものばかりでした。ニュージーランドにいるとき、日本について知ったことは『東京』『アニメ』『秋葉原』『メイド喫茶』などで、ちょっとクレイジーなものでした。日本に行ったら、みんな『秋葉原』の人たちのようにコスチュームを着て生活をしていると思っていたので、僕はその中でどうしたらいいのかな、とひそかに心配していました。でも、日本に来たら日本のみなさんが『普通』で安心しました。

ずっと日本に興味があって、『いつ頃』『何をきっかけに』と聞かれても少し困ってしまうのですが、ずっとずっと日本に興味があって、ずっとずっと日本に来てみたいと思っていました。」

②日本語はいつごろから勉強していますか？

B：「十二歳頃から日本語を勉強しました。初めは四年間ほど学校に通い、一年くらい日本語の家庭教師に来てもらいました。それでもこっちに来る前は日本語ばかりの生活で『学校に来る』ことが心配でした。」

ホームシックになることありませんか？

B：「（少し考える表情で）大丈夫です。ニュージーランドは、いろんな人種の人がいて、いろんな文化があって、それらが調和しています。日本は僕がいるとすぐわかっちゃいます。」

③金沢や金沢高校の印象についてお願いします。

B：「金沢は少し寒いですね。ニュージーランドは山に行けば雪はありますが、金沢のように街には降りません。僕は食べることが好きなので、金沢に来てまず『回転寿司』に行きました。ニュージーランドには『すし』はあっても『手巻きずし』で『にぎりずし』はありません。『回転寿司』のすしはとてもおいしかったです。

金沢高校での生活はとても楽しいです。クラスの友達と話せるランチの時間が一番楽しい。放課後はバドミントンをしています。クラブのメンバーはとても強いです。」

④金沢高校のみんなにメッセージをお願いします。

B：「とてもフレンドリーにしてくれてありがとう。すごくうれしいです。」

「窪田の勝ち」といわせたい！

柔道部

東京の日本武道館で三月二十日から柔道競技の全国選抜大会が行われる。本校柔道部から窪田みゆきさん（一年九組）が女子六十三キロ級で出場する。

昨秋の県新人大会では、本校女子柔道部は団体において優勝した。全国選抜大会の女子団体出場が期待されたが、今年一月に行われた県大会では惜しくも決勝で金沢東高校に負けた。しかし、窪田さんはこの大会で女子六十三キロ級で優勝し、日本武道館に立つことになった。

窪田さんは大会に向けての抱負を「高校生になって初めての全国大会なので、実力を出し切って一つでも多く勝ちたい。そして今後につなげたい。」と話してくれた。

一月の大会では優勝した窪田さんだが、振り返ると内容では負けていた試合もあった。全国大会では誰がみても「窪田の勝ち」となるような試合がしたいと窪田さんは話す。

窪田さんの調子はいい。活躍を期待する。

練習に励む窪田さん（右）

今年度の進路状況

進学

今年度、小松－静岡間の航空路線が就航し、これで小松はソウル・上海・台北・札幌・成田・那覇など国内外十の都市と直接結ばれることになった。小松空港は、ますます北陸のハブ基地化に向けて歩みを進めている。しかし、「リーマン」やアメリカの三大自動車メーカーの名前に代表されるように、世界的な不況の波は高校生の進路にも暗い影を投げかけている。

よく不況の時代には、学費の安い国公立志向、生活費のかからない地元志向が強まると言われている。今回の不況は、卒業後就職を希望している者までが職に就けず、やむを得ず進学を考えなければならないと言う話が出るほど深刻なものだ。保護者も生徒自身も「自宅から通学可能な学校」へという地元志向の意識が顕著になっている。これを受けて、地元の短大や専門学校への希望が増え、四年制の地元私立大学も、これまでにない受験生を数えている。その一方で、推薦を含め県外の大学・短大への受験者は軒並み減少傾向にある。また、国公立大学志願者も地元金沢大学・石川県立大学や近県富山大学などを中心にふくれあがり、競争が一層激しくなっている。石川県立大学の志願倍率五倍（前年比七〇%増）が、この現状をよく物語っている。

進学決定状況は二月二十日現在、金沢大学三名、石川県立大学一名、金沢工業大学六十六名、金沢星稜大学二十六名、金沢学院大学二十名、金城大学五名、北陸学院大学五名、北陸大学六名、金沢医科大学一名、地元短大二十九名、地元専門学校二十名の合格者を出している。

また、県外の主だったところでは、関西大学四名、関西学院大学三名、立命館大学八名、同志社大学四名、名古屋外国語大学五名、京都外国語大学四名、京都産業大学十九名、龍谷大学七名、関西外語大学四名などの知らせが届いている。これから発表がある大学も多く、合格者が増えていくと思われる。

大学入試センター試験は、受験者が二年連続で増加している。これは経済状態もさることながら、多くの私立大学も参加し、センター試験の成績で合否が決まるセンター導入方式が定着したことも影響していると思われる。本校からは、二百三十五名が受験し、うち百四名が地元の金沢大学、富山大学、石川県立大学をはじめ、全国の国公立大学に願書を提出した。現在は、二十五日から始まる二次試験の攻略に向けて頑張っている。三月上旬には多くの朗報が舞い込むことを願っている。

近年の経済不況の中、低迷する地方の活性化をめざすキーワードとして「地産地消」という言葉が聞かれるようになった。地域の人たちが、その地域で生産されるものを使い、地域の需要を増大させようという取り組みだ。経済的には有効な手段かもしれないが、若者の進路に置き換えてみると、何だか寂しい気もする。若い時は、たとえ北陸という地方の地にあっても、将来は世界に羽ばたきたいというぐらいの夢を持って欲しい。航空路線だけでなく、北陸は世界につながっているのだから。

就職

昨年以来続いている世界的な経済不況の波は、一時の最悪期を脱したとはいえ、未だ大きなうねりとなって日本経済に影響を与えている。

政府による緊急雇用対策や法律によるてこ入れもあり、経済界は、景気は少しずつ上向きつつあると分析している。しかし、我々の実生活や有効求人倍率、高校新卒者への求人数等を考えるとなかなか実感できないのが現状である。

このような状況の中、今年度は十六名が就職試験に挑んだ。以前からのつながりもあって、早々と内定をもらう生徒がいる一方で、内定までに苦戦を強いられるケースも見られ、生徒の希望と企業の仕事内容や求める人材とをマッチさせることの難しさを感じた一年であった。

これから高校を卒業しての就職はますます厳しさを増して行くと思われる。就職を考えている一・二年生は、授業での知識はもちろんのこと、新聞やテレビの報道を介して経済・雇用などの諸問題にアンテナを伸ばし、将来の職種と職業観についても考えてもらいたい。

最後に、参考までに今年度の就職先を紹介する。

○男子十三名　東洋コンツェルン、あらた北陸、浅田屋、ヤマト運輸、小松製作所粟津工場、金沢村田製作所、セントラルメディカル、大松水産、泉商事、アートフード、自衛隊　他

○女子三名　金沢信用金庫、金沢ニューグランドホテル　他